

PICK UP MOVIE



©Hui-Chen Huang All Rights Reserved.

日常対話

[2016年/台湾/台湾語・北京語/88分]
監督・撮影：ホアン・ファイチェン 製作総指揮：ホウ・シャオシェン

“カメラの前なら、「言える」「聞ける」こともある”
台湾発・娘がカメラを手に母の本音に迫る、入魂のドキュメンタリー



【解説】台湾の女性監督ホアン・ファイチェンが自身に娘が誕生したことをきっかけに、ひとつ屋根の下で暮らしながら親子らしい会話のなかった母親と向き合うさまを、自らカメラをまわして記録した家族ドキュメンタリー。名匠ホウ・シャオシェン監督が製作総指揮を務めた。母の作る料理を食べること以外に何の接点もない、赤の他人のように暮らす母アヌと娘チェン。チェンは勇気を出して母との対話を決意する。母本人のほか、親族、母のかつての恋人など、

身近な人へのインタビューや対話を通じて、元夫から受けたDV、同性愛者であることの思い、社会からの抑圧など、母アヌの苦悩が浮き彫りとなっていく。そして、チェン自身も過去と向き合い、心に秘めた思いを母に伝える。第67回ベルリン国際映画祭パノラマ部門でLGBTをテーマにした作品に贈られるテディ賞に輝き、第19回台北映画祭では最優秀ドキュメンタリー賞を受賞。2017年アカデミー外国語映画賞の台湾代表作品にも選出された。

[上映日程] 9/25~10/8 (休映：10/4)

上田映劇オープンダイアログ9月の対象作品です。
日程等詳細は、公式HPまたはSNS等でお知らせします。

母と娘の 重い言葉 重い沈黙

本作『日常対話』は、監督である娘アチェンが母親アヌとなんとか対話しようとして、撮影に踏み切った映画だ。家族だからこそ生じる感情のこじれはよくあることだが、それを乗り越えてそれぞれ望む人生を歩もうという強い意志に、感銘を受けた。

アヌは、若い頃から自分の恋愛対象は女性だと自覚していた。だが当時は、女が結婚もせず生きていくなど論外だった。世間の圧力もあって結婚したが、夫の暴力に耐え続ける悲惨な日々。アヌは幼い2人の娘をつれて家を出る。そして自分の人生を切り開いていく。

アヌの仕事は、葬式のとときに死者の魂を極楽世界へ導く儀式を行うものだ。これは台湾固有の葬儀文化で、民間芸能のような体裁で口上を唱え、楽器を奏で、歌をうたい、軽業師のように踊る。総勢6人ほどの編成だ。アチェンは母親の仕事先に連れていかれるうちに、6歳ぐらいから自然にこの演舞をやるようになった。

台湾には多くの廟があり、仏教、道教をはじめ民間信仰の神仏が多数祀られている。それにまつわるさまざまな行事なども練り広げられる。脱世俗と世俗がまじりあう独特の雰囲気があるが、この映画の主人公たちがそんな土着の宗教儀式に携わってきたというのも、作品に深い奥行きをもたらしていると思われる。

アチェンは10歳までしか学校には行けなかった。一方でアヌは、派手な恋愛遍歴を重ねて自分の人生を生きてきたが、反面で娘や世間に対して複雑な感情を抱いている。娘と母はしだいに心の底に秘めてきた思いを吐露していく。ひとつひとつの言葉が重い。

もうひとつ、この映画制作を可能にした台湾の社会的背景に触れておきたい。アチェンは映画制作を、1998年ごろから台湾各地に設立された生涯教育機関(社区大学)で学んだ。またLGBT関連などの社会活動にも参加してきた。周知のように、台湾はアジアで初めて同性婚を合法化し、ジェンダー平等ではアジアで第1位、世界で第6位だ。

tamura shizue
田村志津枝

ノンフィクション作家。一方で大学時代から自主上映や映画制作などに関わってきた。1977年にファスビンダーやヴェンダースなどのニュー・ジャーマン・シネマを日本に初めて輸入、上映。1983年からホウシャオシェンやエドワード・ヤンなどの台湾ニューシネマ作品を日本に紹介し、その後の普及への道を開いた。